

スヌーズレンの環境調整に関する調査研究

－ ISNA 日本スヌーズレン総合研究所主催の
スヌーズレン研修会参加者へのアンケート調査を通して －

姉崎 弘, 藤澤 憲
(常葉大学教育学部) (和歌山県立和歌山さくら支援学校)

An Investigation Research about the Environmental Adjustment of Snoezelen
－ From the Questionnaire Survey for Participants of Snoezelen Workshops
hosted by ISNA Japan Snoezelen Research Institute －

Hiroshi ANEZAKI, Ken FUJISAWA

2017年9月8日受理

抄 録

本稿では、筆者たちの所属団体である ISNA 日本スヌーズレン総合研究所主催の過去 6 回の研修会参加者を対象に、スヌーズレンルームの設置状況及びルームの環境調整等についての調査を実施し、それらの結果を報告するとともに、スヌーズレンルームの使用について、本来どうあるべきかを検討した。その結果、参加者の「47%」（153 名中 72 名）の職場にスヌーズレンルームが設置されており、手作りルームを設置している参加者の方が、既成ルームを設置している参加者に比べて、スヌーズレン環境の配置替えを行う傾向にあることが示唆された。スヌーズレンルームの使用については、利用者のニーズの変化に合わせて、器材等の環境調整を随時実施していく配慮が大切である。また、ルームの配置換えを行う際には、器材が倒れないように安全性に十分配慮した上で環境調整を行っていく必要があると考えられた。

キーワード：スヌーズレン研修会、環境調整、アンケート調査、
既成ルームと手作りルーム、安全性の確保

1 問題の所在と目的

スヌーズレン (Snoezelen) の語源は、オランダ語のスヌッフエレン (Snuffelen、「クンタンにおいを嗅ぐ」という意味) と、ドゥーズレン (Doezelen、「ウトウト居眠りをする」という意味) の 2 つの言葉からなる造語であり、1970 年代にオランダの重度知的障がい者入所施設ハルテンベルグセンターで始められたやすらぎの活動であ

る。利用者の好む光や音、香りなどの感覚刺激を用いた多重感覚環境を設置して、利用者と介助者と環境の三項関係による共感的手法を用いて行われ、今日では世界中の福祉施設や学校、病院、個人宅などで様々な障がい者や病気のある人々などを対象としたレクリエーション（レジャー）や教育・セラピーの方法として広く活用されている（姉崎、2013）。

スヌーズレン環境では、一般的にホワイトルームと呼ばれる部屋を使用することが多く、バルブチューブ、サイドグロー、ミラーボール、ソーラープロジェクター、ビーズクッション、アロマディフューザー、音楽CDなどの器材等が用いられる。こうした環境の中では、好きな刺激を自分で見つけることができ、その刺激に包まれて過ごすことが許容されている。しかし、わが国では、専門のスヌーズレンルームや代表的なスヌーズレン器材の活用が優先され、それらに利用者当てはめるケースが多く、必ずしも利用者のニーズに合ったスヌーズレン環境になりにくい。そのため、スヌーズレンルームを用意し各種器材や用具を揃えて、最初の頃は熱心に実践していても、スヌーズレン活動が停滞し、スヌーズレンの器材が使われなくなったり、器材が倉庫にしまわれたりするケースも見受けられる（姉崎・藤澤、2017）。

Mertens, K. は、日本における講演の中で、スヌーズレンの活用がレクリエーション（レジャー）や教育、セラピーのどの目的であっても、介助者は、利用者たちにとって一番よい効果が得られるにはどうすればよいのかを第一に考え、スヌーズレン環境を随時変えていく必要性を述べている（姉崎、2012）。つまり、健常児、障がい児、認知症者と利用者が変われば、当然のことながら個々の利用者に合わせてスヌーズレン環境も変化させる必要があり、毎回同じ環境になってはいけないということを指摘している。

これまで、スヌーズレン環境等について調査した先行研究として、山口・横田・渡辺（2004）がある。山口らは、日本スヌーズレン協会の会員を対象に、スヌーズレンルームや器材の設置状況等のアンケート調査を実施した。その結果、全国に主要なスヌーズレン施設が27箇所あり、そのうち、専用のスヌーズレンルームがなくても、何らかのスヌーズレンの活動を取り入れている施設があることや、知的障がい児施設や重症心身障がい児施設にスヌーズレンルームの設置数が多いことを述べている。そして、バルブチューブやサイドグロー、ミラーボール、ソーラープロジェクターの順に器材の活用が多いことを報告している。また、木村・柳澤（2008）は、全国国立病院機構の療育指導室のスタッフを対象に、療育空間に関する意識調査を実施している。その結果、スヌーズレンの取組では、器材を多く用いるため、器材等を設置するのに準備時間や労力がかかることから、スヌーズレンルームを常設することへの意識が高いことを報告している。これらの研究では、スヌーズレンルームや器材の設置状況や介助者の意識調査等については詳しく述べられている。しかし、Mertens, K. が指摘する利用者のニーズに応じたスヌーズレン環境の調整についての視点はなく、スヌーズレンルームを有する施設では、どの程度適切なスヌーズレンの環境調整を実施しているのかまでは言及されていない。

そこで、本稿では、筆者たちの所属団体である ISNA 日本スヌーズレン総合研究所主催の研修会（過去 2 年間、計 6 回実施）の参加者を対象に、スヌーズレンルームの設置状況及びルームの環境調整等についての調査を実施し、それらの結果を報告するとともに、スヌーズレンルームの使用について、本来どうあるべきかを検討することを目的とした。

2 方法

2015 年 8 月～2017 年 7 月に大阪、東京、奈良で行われた ISNA 日本スヌーズレン総合研究所主催のスヌーズレン研修会計 6 回の参加者、計 153 名（教育関係 84 名、

スヌーズレン環境に関するアンケート	
問 1	あなたはどんな分野に携わられていますか。職種や施設名、学校名などお書きください。 <input type="checkbox"/> 医療 <input type="checkbox"/> 福祉 <input type="checkbox"/> 教育 <input type="checkbox"/> 学生 <input type="checkbox"/> その他（具体的に _____） （職種： _____）（施設名や学校名[障害領域も含]： _____）
問 2	現在の職場等にスヌーズレンルームがありますか。 <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない
問 3	スヌーズレンルームが「ある」と答えた方にお聞きします。ルームは、主に既成の専用ルーム（例えばホワイトルームなど）ですか、または、手作りのルームですか。 <input type="checkbox"/> 既成の専用ルーム <input type="checkbox"/> 手作りのルーム
問 4	続けて、スヌーズレンルームが「ある」と答えた方にお聞きします。どんな器材が設置されていますか。わかるだけお書きください。器材の名称がわからなければ、だいたいこういうものという様子をお書きください。 <div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%; margin-top: 5px;"></div>
問 5	続けて、スヌーズレンルームが「ある」と答えた方にお聞きします。ルームには一般器材（バブルチューブ、サイドグロー、ソーラープロジェクター、ビーズクッションなどの代表的なもの）や一般器材とは違うスヌーズレングッズを取り入れていると思います。これらの器材等の主な使用状況をお教えてください。 <input type="checkbox"/> 主に一般器材のみを使用している <input type="checkbox"/> 主にスヌーズレングッズを工夫して使用している。 <input type="checkbox"/> 一般器材とスヌーズレングッズの両方を使用している。 器材等の環境調整（配置換え）の頻度をお教えてください。 <input type="checkbox"/> ほとんど環境調整（配置換え）せずに使用している。 <input type="checkbox"/> たまに環境調整（配置換え）をしている。 <input type="checkbox"/> 利用者一人一人の実態に合わせて、毎回環境調整（配置換え）をしている。

図 1 スヌーズレンの環境に関するアンケート用紙

医療・福祉関係 66 名、その他 3 名)を対象にスヌーズレンの環境調整に関するアンケート調査(選択マーク式と一部記述式)を実施した(図 1 参照)。

また、職場にスヌーズレンルームが有ると回答した参加者に対して「既成ルームなのか、手作りルームなのか」を尋ね、「器材等の配置換えの状況」を調査した。その際に、回答方法を「毎回配置換えをする(3点)」「たまに配置換えをする(2点)」「ほとんど配置換えをしていない(1点)」の三択とし、一元配置分散分析を実施した。各々の質問に対する集計結果及び分析の結果を基に、スヌーズレンルームの使用について、本来どうあるべきかを考察した。

ここでいう「既成ルーム」とは、代表的なスヌーズレン器材が常設されている専用のスヌーズレンルームのことを意味している。また、「手作りルーム」とは、主に手作りのスヌーズレングッズなどが設置されている(一部代表的なスヌーズ器材が設置されている場合も含む)スヌーズレンルームを意味している。

3 結果

1) 職場におけるスヌーズレンルームの設置状況

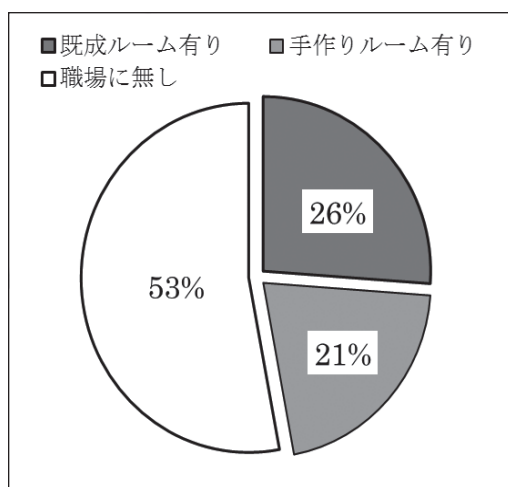


図 2 職場におけるスヌーズレンルームの設置状況

図 2 に、職場におけるスヌーズレンルームの設置状況を示した。

参加者の「26%」(153 名中 40 名:教育関係者 25 名、医療・福祉関係者 15 名)が、職場に既成のスヌーズレンルームが有り、参加者の「21%」(153 名中 32 名:教育関係者 10 名、医療・福祉関係者 22 名)が、職場に手作りのスヌーズレンルームが有った。つまり、参加者の計「47%」(153 名中 72 名)が、職場にスヌーズレンルームが有り、内訳は 72 名中 35 名が教育関係者であり、37 名が医療・福祉関係者であった。また、参加者の「53%」(153 名中 81 名)が、職場にスヌーズレンルームが無しの結果であった。

2) 器材等の配置換えの状況

表1に、教育関係者の手作りルーム、教育関係者の既成ルーム、医療・福祉関係者の手作りルーム、医療・福祉関係者の既成ルームの4つのグループにおける分散分析の結果を示した。

表1 4つのルームのグループにおける分散分析の結果

ルームのグループ		平均値	標準偏差	F
(教育関係)	手作りルーム	2.24	0.849	21.9*
(教育関係)	既成ルーム	1.00	0.000	
(医療・福祉関係)	手作りルーム	1.53	0.640	
(医療・福祉関係)	既成ルーム	1.00	0.000	

N=10～25

*p<.05

職場に既成ルームが設置されている教育関係者及び医療・福祉関係者の全員が、「ほとんど配置換えをしていない」の回答であった。表1に示すように、教育関係者の手作りルーム、教育関係者の既成ルーム、医療・福祉関係者の手作りルーム、医療・福祉関係者の既成ルーム4者間の器材等の配置換えの状況を比較するために分散分析を行った。その結果、 $F(3, 68)=21.9, p<.05$ となり、ルームの主効果が認められた。TukeyのHSD法による多重比較の結果、教育関係者の手作りルームの得点は教育関係者の既成ルーム及び医療・福祉関係者の既成ルームに対し、有意に高いことが認められた ($p <.05$)。また、医療・福祉関係者の手作りルームの得点は医療・福祉関係者の既成ルームに対し、有意に高いことが認められた ($p <.05$)。

3) スヌーズレン器材の主な使用状況と設置状況

スヌーズレン器材の主な使用状況として、職場にスヌーズレンルームが「有り」の参加者72名のうち、手作りルームにおいて、主にスヌーズレンの代表的な器材を使用している割合が「25%」(72名中18名)、主に手作りスヌーズレングッズを使用している割合が「7%」(72名中5名)、スヌーズレンの代表的な器材とスヌーズレングッズを併用している割合が「12%」(72名中9名)であった。一方、既成ルームにおいて、主にスヌーズレンの代表的な器材を使用している割合が「25%」(72名中18名)、主に手作りスヌーズレングッズを使用している割合が「10%」(72名中7名)、スヌーズレンの代表的な器材とスヌーズレングッズを併用している割合が「21%」(72名中15名)であった。

表2に、代表的なスヌーズレン器材の設置状況を示した。職場にスヌーズレンルームが「有り」の参加者の多くは、代表的なスヌーズレン器材を活用しており、多い順にバブルチューブ「81%」(72名中58名)、サイドグロー「67%」(72名中48名)、ソーラープロジェクター「63%」(72名中45名)、ミラーボール「44%」(72名中32名)、

ビーズクッション「42%」（72名中30名）、アロマディフューザー「25%」（72名中18名）であった。これらの結果を、山口・横田・渡辺（2004）のスヌーズレン器材の設置状況結果と比較すると、ソーラープロジェクターとミラーボールの設置状況の順番が異なるだけで、他はほぼ同様の結果であった。

代表的なスヌーズレン器材のイメージ図として、図3にバブルチューブを、図4にサイドグローを、図5にソーラープロジェクターを、それぞれ示した。

表2 代表的なスヌーズレン器材の設置状況

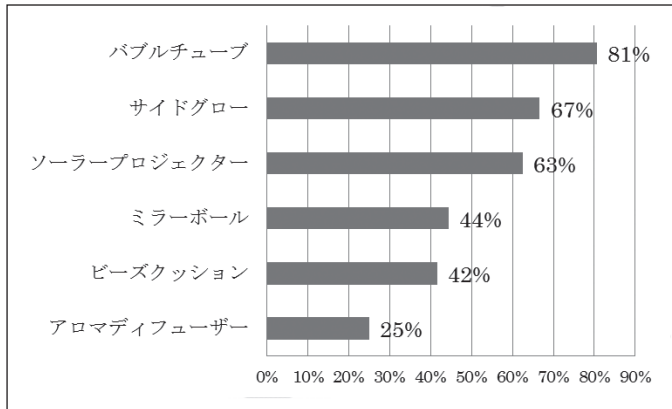


図3 バブルチューブ

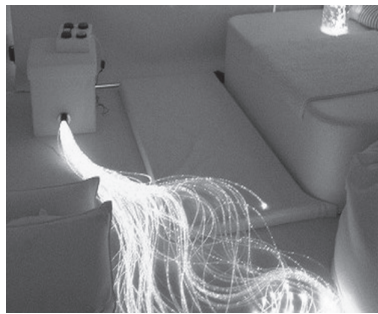


図4 サイドグロー



図5 ソーラープロジェクター

4 考察

参加者の約半数の「47%」（153名中72名）が職場にスヌーズレンルームを設置し、そのうち、教育関係者が35名、医療・福祉関係者37名と、職種別の分野におけるスヌーズレンルーム設置数の偏りは見られなかった。また、既成ルームか手作りルームかを調査すると、職場にスヌーズレンルームを設置している参加者72名中、既成ルームが40名、手作りルームが32名と数に大きな違いはほとんど見られなかった。これらの結果は、山口・横田・渡辺（2004）の調査において、当時、全国に主要なスヌーズレン施設が27箇所しかなかった結果と比較すると、今日ではスヌーズレンルームを設置している事業所等が大幅に増え、スヌーズレンが偏った職種の分野で活用されるのではなく、教育や医療・福祉分野にも広がってきていることが示唆される。

器材等の配置換え状況を見ると、教育関係者の手作りルーム、教育関係者の既成ルーム、医療・福祉関係者の手作りルーム、医療・福祉関係者の既成ルームの4つのグループにおける分散分析による結果から、手作りルームで実践をしている参加者の方が、既成ルームで実践をしている参加者に比べて、スヌーズレン環境の配置替えを行う傾向にあり、職種別によらず、既成ルームを設置している参加者は、ほとんど環境調整（配置換え）をせずに使用している結果が得られた。また、手作りルームを設置している医療・福祉関係者のごく数人が、たまに環境調整（配置換え）を行っている結果にとどまり、医療・福祉関係者は、既成ルームや手作りルームといったルームの種別に限らず、配置換えをする機会が少ない傾向にあることが示唆された。

表2のスヌーズレン器材の設置状況を見ると、既成ルームや手作りルームといったルームの種別によらず、バブルチューブ、サイドグロー、ソーラープロジェクター等の代表的なスヌーズレン器材が主に使用されているという結果であった。

これらの結果から、既成ルームでは、スヌーズレンの比較的大型で重量のある代表的な器材の使用が中心となるため、実践者が器材を移動させずに予め設置された条件の下で使用しようとする傾向が多くなると考えられる。一方で、手作りルームでは、代表的な器材がなくても、同様の効果のある安価で比較的小型な器材や用具を見つけて工夫して使用する機会が多くなり、その結果、実践者が、スヌーズレン環境の配置替えを工夫し、利用者一人一人のニーズに合わせた取組がより可能になるのではないかと考えられる。

スヌーズレンの代表的な器材には、スヌーズレンルームの天井や壁、床などに固定設置されたものがある。例えば、バブルチューブは大きな台に固定されて、移動させることは容易ではない。一方で、サイドグローやソーラープロジェクター、ビーズクッション、アロマディフューザーなどは、比較的小型で移動が可能である。例えば、利用者がサイドグロー（光ファイバー）の束を手を持ちたり、自分の体に巻きつけて過ごすことが予想できれば、事前に活動しやすい広い空間を確保して、そこにサイドグローを設置することが考えられる。また、壁に映る映像を見て、臥位姿勢でリラックスして過ごすことを好む利用者には、映像が見えやすい位置にビーズクッションを設置して、その上に横になることも考えられる。

もし、現在事業所等にあるスヌーズレン環境をそのまま使用して実践を継続させるという取組が強調されると、「今あるスヌーズレン環境に利用者をあてはめて過ごさせればよい」という安易な取組に陥る危険性が生じることが危惧される。

スヌーズレンルームに設置されているスヌーズレン器材を毎回全て配置換えをする必要があるわけではないが、介助者（実践者）が事前に利用者の好む感覚刺激を把握し、過ごしやすい姿勢に十分留意した上で、利用者のニーズの変化に応じて環境調整を行っていく配慮が何よりも大切であると考えられる。

スヌーズレンルームの使用についての留意点として、Mertens,K. が指摘するように、利用者のニーズに合わせて、器材等の環境調整を実施していくことが大切である。その際に、器材を移動させようとする、例えば、器材が倒れるというリスクが生じる可能性がある。そのため、安全性に十分配慮した上で、環境調整を行っていく必要があると考えられる。

今後の課題として、利用者の様々な実態やニーズに応じたスヌーズレンの環境調整のあり方について調査を行い検討していく必要がある。例えば、比較的動きの少ない障がい者の場合と動きのある障がい者の場合に大別するなどして検討していくことが求められる。

引用・参考文献

- 1) 姉崎 弘 (2013) わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究, 51 (4), 369-379.
- 2) 姉崎 弘・藤澤 憲 (2017): スヌーズレンが成立するための基本要件について. スヌーズレン教育・福祉研究, 1, 19-28.
- 3) 木村麻美・柳澤 要 (2008): スタッフの意識調査からみた病院における療育空間について -重症心身障害児・者の療育活動とスペースに関する研究 その2 (障がい者施設、建築計画 I). 学術講演梗概集, E-1、建築計画 I, 443-444.
- 4) 山口有次・横田善夫・渡辺仁史 (2004): スヌーズレン空間に関する建築計画的な研究. 日本建築学会学術講演梗概集, 415-416.
- 5) 姉崎 弘 (編著) (2012): スヌーズレンの基本的な理解 -マーテンス博士の講演「世界のスヌーズレン」-. 国際スヌーズレン協会日本支部, 27-45.